

## 朗読 三四郎

- 0、 夏目漱石の長編の朗読第二弾。タイトルの候補が「青年」、「東西」、「三四郎」、「平々地」と、複数あったのは興味深い。かりに「青年」であったら、『三四郎』に触発して書かれたという鷗外の『青年』はどんなタイトルになったのであろう。
- 1、 『こころ』全編を読み終えたあと、『三四郎』を読み始めると、その文体の違いに愕然とする。とにかく文が短く、たたみかけるような語り口なのである。このテンポ感をあらわそうとするためには、読む速度も上げていかざるを得ない。おそらく漱石にとっては、『坊っちゃん』の語り口を意識し、そのスピード感で青年像を描き出そうと試みたのではなかろうか。
- 2、 汽車の風景で印象的なのは川端康成の『雪国』。『三四郎』の場合も女性への眼差しが中心になるが、漱石の諧謔味が発止としている。窓外に弁当の折をポイ捨てるところに時代を感じるが、それが女の額に当たるところがまた生々しい。
- 3、 小説の醍醐味は冒頭の数ページで決定づけられるものであるが、いきなり滑稽さとなまめかしさが全開となるのは、『三四郎』の特徴を語る上で重要な要素となる。新聞小説として次を読ませたくなる心憎いまでの技巧である。
- 4、 芭蕉の「一家に遊女もねたり萩と月」、あるいは蕪村の妖艶な世界を髭髯とさせるような一節。それに青春の恥じらいと直線的な初々しさとが加味される。これは明らかに近代的な感性であろう。
- 5、 「この男」は初出当時の挿絵を見ても、いきなり漱石本人の予感。ポンポンとしたテンポで自らを嘲うかのように描き出す筆致。ただし、青年に対する温かな視線は確実に背後に感じられる。
- 6、 「この男」が「相手」になり、やがて「髭のある人」へと徐々に変化していくのがおもしろい。三四郎の心が、人間関係の変化に伴って、微妙に揺れ動いて行くさまが巧妙に描かれている。それにしても、駅に着くと同時に目が覚めるという人間の習性は百年後も変わらないものだと改めて思った。
- 7、 「その男」の話しぶりは、『吾輩は猫である』の「迷亭」を髭髯とさせる。話が次から次へと思わぬ方向に飛躍し、相手を煙に巻きながら、ストーンと落とす。おそらく漱石本人もこういうユーモア感覚の持ち主であったのだろう。
- 8、 漱石の社会批評として人口に膾炙されている「滅びるね」の一言。その後の日本の歩みを見ると漱石の予言は的中するわけであるが、この部分をあまり大袈裟に捉えず、むしろ「にやにや笑っている」姿に目配りしながらこのあとを読み進めていくことも大事なのではないかと思う。

- 9、 田舎から東京へ出てきた者が感じるスピード感が、目まぐるしく変化する文体でよく表現されている。そして、「けれども学生生活の裏面に横たわる思想界の活動には毫も気が付かなかった。——明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年で繰返している。」という漱石の認識の深さ。
- 10、 大学の研究室というものは、意外に 100 年経ってもそれほど変わらないものなのではないか。もちろん機器類に関しては似ても似つかないが、そこに漂う空気が見事に描かれている。本郷に馴染みのある者は、それこそにやにや笑いながら読み進めていることであろう。
- 11、 「穴倉」と「現実世界」との対比の妙。それにしても、外の世界の情景描写が非常に美しい。そして、池の底に青い空を見て、そこに近代人の自我の孤独を感じるというディテールが漱石ならでは展開である。
- 12、 与謝野晶子の「金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に」は 1905 年に発表されており、あるいはそのイメージが投影されているかのような描写。そして、「その時色彩の感じは悉く消えて、何ともいえぬ或物に出逢った。」の表現に「多崎つくる」を重ねるのは穿ち過ぎであろうか。
- 13、 明治のころから理系の人の頭の中はこのように動いていたのだという感慨を覚える。そういえば、野々宮のモデルと言われる寺田寅彦に「科学者とあたま」
- 14、 ベルツの銅像から枳殻寺を過ぎていくと春日通りにぶつかる。これを本郷三丁目の方向へ歩いて行くことになる。つい、当時の店がどうなったか気になってしまうが、そのあたりを解き明かすような研究もあるかもしれない。日本小間物屋は「かねやす」のことであろう。
- 15、 最近の大学は変わってしまったが、三十年ほど前までは、講義が始まらない、教授が遅れてくる、というのは大学の日常風景であった。三四郎のように癩癩を起こす学生もいたことであろう。
- 16、 主人公の三四郎が成長していく姿を描く教養小説とも言われる『三四郎』。この学問に向かう姿には初々しさを感じる。そこに一ひねりのユーモアや興味深いエピソードを巧みに加味していくのが漱石の真骨頂ともいえよう。
- 17、 いわゆる五月病的な症状や就職への不安についても、さらりと描かれている。そうした背景の中で、登場人物たちが生き生きと動き出す。昇之助や小泉八雲、淀見軒や青木堂といった実在の人物や店の名を登場させることで、作品はよりリアルなものになっていく。
- 18、 大学時代には通常以上に単位を取ったほうだが、一番多いときでも週 21 時間だった。40 時間がいかに多いか想像を絶する。さて、後半の小さん論は、

演劇論としても興味深く読める。小さんも円遊も今ならネット上で聞くことができる。小さんは思ったよりもたたみかけるような早口で、江戸のいきをポンポン伝えるような語り口だ。

- 19、 図書館風景をこれほど生き生きと描写した小説があっただろうか。「箱入りの札目録」は最近の大学ではほとんどお目にかからないかもしれないが、肩が痛くなる感覚はよくわかる。図書館の匂いまで伝わってくるような文章。
- 20、 文語の朗読には苦勞した。しかしある程度コツをつかむと、リズムカルなので読みやすくもある。それにしても、このような落書きを見て、大学時代の図書館の手洗いの落書きを思い出した。妙に哲学的な内容であったのを覚えている。
- 21、 東京の市内をあちこちと回る情景に興味をひかれる。当時の「電車」としては、現在の路面電車のような一両編成が主流であったようだが、明治末から急速に連結のタイプが増えていったらしい。そして、その路線のほとんどが現在の地下鉄やJRの路線と重なる。
- 22、 高度成長期の前ぐらまでは、そこそこの上流階級宅では「下女」のいる風景が日常であった。若い独身男性を世話する「下女」とはどのような存在であったのだろう。そして、家事一切を切り盛りしてもらいながら、留守番を任せられないというのは何とも滑稽な気もする。EPA問題が巷を賑わせる今日だからこそ、ついそんなことを考えてしまう。
- 23、 『三四郎』の直前に書かれた『夢十夜』に見られるように、無意識の古層につながる闇を描くことにかけて、漱石は独特の筆致を持っている。秋の虫の音を背景に、かすかな嘆声、汽車の轟音、そして提灯の影と男たちの声、というようにそれぞれの要素が絡み合いながら、病院風景の妄想とともに蠢き出すのである。
- 24、 当時、轢死による自殺が増えていたということであるが、このような生々しい描写で小説に挿入することの意味を考えてしまう。三四郎の夢ではないが、これは読み進めていく読者にも深刻な印象を与えることになる。挿絵も妙に印象的である。
- 25、 「昼と夜の差別」を「世界が今朗らかになったばかりの色をしている。」と言い切るのは秀逸。そして、新しい人間関係が展開していきそうな予感のもとに筆が進められて行く。それにしても、前回と今回の挿絵は一種独特の雰囲気醸し出している。
- 26、 野々宮よし子の描写は、どうも精彩を欠いているように思えてならない。実際、声に出して読んでみても、まだるっこしい。「池の端で逢った女」の描写の鮮やかさと対照をなす。
- 27、 よし子に比べ、「池の女」の描写はここでも明らかに鮮やかなものにな

っている。あたかも一幅の絵画を鑑賞しているかのようである。その意味で、漱石は女性たちに対する視線を細やかに使い分けているといえよう。

- 28、 「女」と「男」という語をあえて使用する文脈。「男」はすぐ「三四郎」に戻るが、「女」は修飾もなくそのままである。一方で、顔や動作の描写が非常に細かい。やはり、ここでも鮮やかな印象を残す。
- 29、 下痢の症状を伴っているところから、三四郎はカルチャーショックに陥っているようである。また、当時の大学は9月始まりであったから、いわゆる五月病に当たる時期に秋が深まり、食欲がわいてくるというのも興味深い。
- 30、 漱石の季節の描写は非常に美しいことがある。ただし、『草枕』は別として、それは一瞬の美しさである。小説の中に俳句の季語を持ち込んだような感じとでも言えようか。それが高低差のある東京の街を背景に、物語の展開に巧みに織り込まれていく。
- 31、 「広田」、「広田先生」、「広田さん」が混在するが、漱石の場合、人称をどのように使い分けているのだろうか。「三四郎」は「三四郎」であるし、「与次郎」も「与次郎」である。それにしても、広田先生の鋭い警句を発しながらの飄々ぶりは、古き良き時代を感じさせる。
- 32、 ジェネレーションギャップがはつきりあらわれる一節。広田先生のモデルとされる岩元禎も、そして漱石自身も明治の改元前後の生まれであるから、街並みの統一感のなさに一家言のある世代。これは現代までそのまま持ち越されている。そう言えば、時代錯誤＝アナクロニズムというのは、ここで覚えた単語だった。
- 33、 三四郎と与次郎の絡み合いは、『吾輩は猫である』の苦沙弥と迷亭のそれを想起させる。そして「暗闇で饅頭を食うように、何となく神秘的である。」というような表現にも漱石の諧謔性が発揮されている。
- 34、 三四郎と与次郎の掛け合いは、さながら落語のような趣きである。そのため、朗読の際にリズムを出すことが難しくなる。そして、広田先生の「偉大な暗闇」というのは、妙に印象に残る形容である。
- 35、 与次郎との掛け合いが終わり、しつとりと秋の気配が入り立つ。三四郎が低徊家というところに、ひどく共感を覚える。これなどは若かりし頃には読み飛ばしていた部分であろう。
- 36、 「三つの世界」の分類が興味深い。ある意味では百年後の現代にも当てはまるのであろうが、第一の世界の影が薄れてきたために、現代の方が何とはなくのっぺりしてきているように思う。それにしても三つの世界の統合は、何とも唐突である。
- 37、 広田先生の引っ越し先を、漱石自身の住まいのすぐ近くに持ってくるのが興味深い。ここまで番地がはつきり書いてあると、実際はどうだったのか、

つい詮索したくなってしまう。当時の読者がこの界限を散策することはなかったのだろうか。

- 38、 三四郎の眸が女の眸に捉えられる瞬間は何とも鮮やかである。「ヴォラプチュアス」というけっして一般的ではない外来語と、グルーズというややマニャックな画家を登場させ、残酷な眼付と結んでいる。グルーズの絵画に登場する女性は、どちらかというアンニュイな印象を受けるのであるが……。
- 39、 短い文が連続する美しく印象的な段。歴史的現在と過去とが微妙に交錯し、一種独特のリズムを作っている。乾いた文体でありながら、時折、落語や講談の人情話の語り口を感じさせるようなリズムが潜んでいるように思う。
- 40、 男女の非対称性を、掃き掃除と拭き掃除、光と闇、空と地上、科学と詩という様々な対象物の中で描き出す。こうした舞台装置の中で、漱石の描く登場人物たちは生き生きと動き出す。
- 41、 スピード感のある掛け合い。美禰子の鷹揚な態度で階子段を下りてくる姿、与次郎のバタバタ歩き回る様子、三四郎のしゃがみ込んで本を読みだす呑気さ。これらが映画の一シーンのように展開される。
- 42、 四人の登場人物が掛け合いを見せる段。ことばにしても行動にしても、それぞれが巧みに描き分けられている。英文学を研究しながら、漱石はなぜ戯曲を書かなかったのであろう。
- 43、 サンドウィッチを作り、運び、相手を竦ませるような美禰子。それがアフラ・ベーンと二重写しになってくる。「職業として小説に従事した初めての女」という点を、漱石は強調したかったのか。
- 44、 "Pity's akin to love." 拙訳「哀れみは愛しきに似たり」。『三四郎』は教養小説であるとも言われるが、このような例文を出されると何やら翻訳を試みたくなってしまう。どうも漱石の思う壺かもしれない。それにしても美禰子の「美しい奇麗な発音」とは、どんなものだったのだろうか。
- 45、 皆を煙に巻く「先生一流の論理」というのも興味深い。こうしたユーモアを人間味と感ずるからこそ、先生の回りには若い連中が集まってくるのであろう。菊人形は、現代では寺院の境内などでしか見られないのは残念である。
- 46、 三四郎とよし子の関係は、明らかに美禰子との関係と描き分けられている。そうした関係の背後にある風景も随分と異なってくる点が興味深い。よし子を彩るのは、黒い影ができる萩であり、ひよろひよろした南天である。
- 47、 会話文が連続するさながら戯曲のような段。「よし子が画のつづきを描き出してから、問答が大変楽になった」という微妙な心理の変化に注目する

あたりが漱石ならではである。

- 48、 会話文から一転して、長い地の文が続く。背景と心理の変化を巧みに重ね合わせながら筆を進める漱石の技法。朗読してみると、さらに独特のリズム感を覚えてくる。そして、翌日も読ませたくさせる新聞小説としての仕掛け。
- 49、 三四郎の考える「三個の世界」のうち二個をわずか四人の集団に代表させてしまう。そこでやや気になるのが第一の世界であるが、実はそれぞれの人物が心の中に抱えていると考えることもできるのであろうか。
- 50、 毎日通勤途中に数人の「乞食」を見かけるのであるが、感覚としては三四郎の感じ方にもっとも近いように思う。「前を通るとき、一銭も投げてやる料簡が起らなかったのみならず、実をいえば、寧ろ不愉快な感じが募った」とは言い得て妙。少なくとも広田先生のように考えが至らない。
- 51、 迷子のエピソードでは、漱石の筆鋒が鋭い。百年後の今日にも十分通用するような、我々に突き付けられた刃である。そして、団子坂上から坂下の混雑を見下ろした描写は妙に印象に残る表現。
- 52、 養老の滝というのは、現在の須藤公園にある滝のことか。三四郎と美禰子が沿って歩いた小川というのは、藍染川とのことであるが、現在は暗渠になっている。ただ、川の記憶は「へび道」という蛇行する道に残されている。
- 53、 三四郎と美禰子の視線が対照的である。必ず空を見つめる美禰子に対して、三四郎の視線は低いところにとどまる。そして、水が濁ると空が濁るのがアナロジカルに描かれ、比喩の応酬が続いて行く。それにしてもこの時期のこの地域は何と長閑なものであったことか。
- 54、 はじめて『三四郎』を読んだとき、まだ聖書は読んでいなかった。ただこの「ストレイシープ」という語は確かに印象に残り、その後もずっと引っかかっていた。美禰子自身のことか、三四郎への警句か、あるいは行先を見失った日本社会のメタファーか。
- 55、 「ストレイシープ」が執拗に繰り返される。謎めいたことをそのまま残しておくのもストレイシープなのであろうが、一方で自然はそれとは関係なく無常の相を見せる。そして、唐辛子の赤がそれにアクセントを与える。
- 56、 章を改める際に、美禰子との場面をぱつさり打ち切り、与次郎との場面に転換させ、「stray sheep」の語のみでつないでいくところに、漱石の技巧を感じる。背景装置も一変する。
- 57、 『文芸時評』の名の如く、与次郎の口を借りた文学論、文壇論の片鱗が展開されている。与次郎の本音が垣間見えるのも興味深い。そこにさらに三四郎の視点を持つてくることで、表現に奥行きが出てくる。
- 58、 「滑稽趣味」とはよく言ったもので、むしろこの段には漱石自身の諧謔

味が炸裂している。小泉八雲の後任となった自らを広田先生に投影させながら、同時に与次郎の「何にもない」長論文には当時の評論に対する皮肉が込められているかのようである。そして、それに対峙する美禰子の羊の画の真実。

- 59、 イプセンを引き合いに出しながら、漱石の女性論の片鱗が示される段。それにしても、その背景に馬鹿貝の干物が登場するあたりに、漱石の諧謔味が示される。「乱暴の内訌」というのも穿った表現である。
- 60、 女性論から社会制度の中の人間論へと話が展開しかかったところであったん休止。こうしたエピソードの積み重ねで小説を構成していく手法は、あたかも映画を見るような感じである。イプセンにしても、この手法にしても、100年前の文芸が現代に与える影響には多大なるものを感じる。
- 61、 与次郎の軽口は、今の時代にも通用しそうなタイプであるが、なかなかこのレベルの内容でまくしたてることは難しいように思う。その分、ふっとしたときに表れるしみじみとした語りには、より一層の真実味が感じられる。
- 62、 学生の群像が活写される段。黒い影が「一人々々に明るくなって、部屋の中へ這入って来る」という描写は、情景が手に取るように感じられる。それにしても学生親睦会が洋食とは、「紳士的」そのものである。
- 63、 明治時代の演説口調を地の文に織り込んでいるところが興味深い。当時、大仰な表現が多かったことは頷けるし、新青年の血気盛んな様子も痛いほど伝わるのであるが、文芸の意義を麦酒と珈琲の間に位置付けた点こそ漱石の面目躍如たるところであろう。
- 64、 当時の世相が巧みに織り込まれている段。「三越呉服店の看板」は、画像検索で容易に確認できるが、やはり明治末年ごろのものは古風な女性像が中心で、大正期以降にモダンなものへと変化していくのがわかる。美禰子は時代を先取りした女性であったわけである。
- 65、 当時の大学の運動会が活写されている。現在の水準からは比べる由もないが、この時代としてはこのタイムや距離は上出来ではないか。すでに陸上競技の基本的な種目を入れ、計測掛がフロックを着ているあたりが、時代がかっていて興味深いと同時に、スポーツに対する真摯な姿勢が感じられる。
- 66、 築山の上と下で会話を交わすところに空間の広がりを感じる。よし子と美禰子が対照的に描かれるが、美禰子の描写に色がない分、神秘的な雰囲気が増してくる。それにしても、サッフォーの伝説は当時、人口に膾炙していたのであろうか。
- 67、 池の描写が印象的である。三四郎と美禰子の心象風景を象徴的に示すようでありながら、そこから回想のシーンにつながっていくあたりに展開の妙が感じられる。

- 68、 この段は通常よりも字数が多いように感じられるが、何よりも漱石にしては珍しく文が長いので、読むのに閉口した。他愛もない三四郎の嫉妬心ではあるが、三四郎の逡巡が文体にも表れてくるのが興味深い。
- 69、 章が改まり、男女関係から一転して師弟関係へ。明治の時代でありながら、かなり自由闊達な雰囲気を感じられる点が興味深い。美禰子の羊の画に続いて「小川」がキーワードになっている。そして、三四郎の姓も小川である。
- 70、 本当に偉大な思想家は自ら著述を残さないなどと言われるが、その意味では広田の位置づけは、こうした思想家のパロディとも受け止められる。だからこそ「偉大なる暗闇」なのであろう。
- 71、 「偽善家」の反対に「露悪家」という造語を持ってきている。「偽悪」ではなく「露悪」という点が興味深い。そして、この二つを「自己本位」という漱石独自の概念でつないでいる。それにしても、英国では果して広田が言うように利己主義と利他主義の平衡が取れているのであろうか。
- 72、 当時の文化的なサロンがいかに関係形成されていくかを示す段。いわゆる「洋行」組が集うような狭い世界ではあるのだろうが、そうした人間関係の構図が、一般の読者に広く示される点に新鮮味を感じる。
- 73、 洋行帰りが日本の伝統的な唄や和楽器に親しんでいく様子が描かれている。また、文化的なアイテムとして「団扇」がキーワードになってくる。そうすると、黒田清輝の「湖畔」が髣髴としてくるのであり、三四郎池と芦ノ湖とが重なりあい、物語空間に奥行きが生まれてくる。
- 74、 教師の名を学生が呼び捨てにするのはこのころからの伝統か。そして、「筆を執るものの責任」ということばには重みがあり、漱石の本心が吐露されているようである。また、子を思う母の気持ちはいつの時代も変わらないようである。
- 75、 与次郎の話しっぷりには、確かに「落語家」的なものがある。こうした話芸の伝統を新時代の学問・文芸につないでいくあたりが漱石の真骨頂である。「鹿のような眼」という比喻、そしてヴァイオリンをほしがるよし子というあたりも興味深い。
- 76、 与次郎のキャラクターは独特であり、漱石も楽しみながら描き出していたのではないかと思われる。いい加減に他人の金を使い込んでおきながら、友誼を重んじて借金に奔走する姿は滑稽そのものであろう。この憎めない人物像が確実に時代を超えるのである。
- 77、 岡野の栗饅頭とは「岡埜栄泉」のものであろうか。甘党の漱石ならではの選択だが、現在はない本郷三丁目の店舗なのかもしれない。精養軒にしても、東京でありながら 100 年前の老舗が登場するのは嬉しいことである。



- 78、 漱石は低徊派であるとも言われているが、文字通りの低徊の様子が三四郎の態度にあらわれている。考えが行きつ戻りつしながら、あまりに優柔不断の印象を与え、現代の読者には人気がないようであるが、このあたりが逆に村上春樹の登場人物にもつながってくるような気もする。
- 79、 季節は晩秋。そこにヴァイオリンの音とくれば、「秋の日の ギオロンの ためいきの 身にしみて ひたぶるに うら悲し。」を思い起こす。漱石と懇意であった上田敏が『海潮音』を出版したのは1905年。『三四郎』の新聞連載はその三年後のことである。
- 80、 「あなたは索引の附いている人の心さえ中て見ようとなさらない呑気な方だのに」という美禰子のことばは謎めいている。そして、二人の間の微妙な関係を、美禰子の立ち上がって戻る「動」と三四郎の座ったままという「静」との組み合わせで描き出している。
- 81、 漱石は、三四郎の内面は描くが、美禰子の心の中は描写しない。その分、発することばの調子や間の取り方が極めて重要になってくるのであるが、残念ながらそれは楽譜のように明示されていない。読み方一つで様々な美禰子像を描いていくことができるであろう。
- 82、 比較的長い地の文が続く段であるが、一つの文は極めて短い。こうした文の短さが漱石特有のリズムを作り出しているのであるが、それだけにこれを声に出して読むのは難しい。そして、ここでは金と人情と芸術とが、あくまで露骨にならずに絡み合っていくのである。
- 83、 美術館風景。それぞれの人物が思い思いの方を向いているのが興味深い。「実物を見る気にならないで、深見さんの気韻を見る気になっていると、なかなか面白い所が出て来ます」というのは、俳画に通じるような気がする。
- 84、 男女間の非常に繊細な描写が続く。室内の薄暗さ、迫り来る夕闇、一瞬の接触、戸外の降り出したばかりの雨と雨宿りのできない杉の木。この幽さと危うさとが二人の関係を如実に物語っている。全編中の白眉の文章である。
- 85、 三四郎の言う第三の世界の次には、第二の世界が描かれる。一般的な学問の世界からすると、かなり特殊なものではあるが、「各自勝手な所へ坐る。譲るものもなければ、争うものもない。」というの、この世界の理想像であろうか。
- 86、 「第二の世界」の風景が続く。理系・文系の枠を超えてこうした話ができる雰囲気、明治の末にはできあがっていたことが興味深い。物理学については、当時の最先端の理論がさりげなく紹介されている。
- 87、 戯曲のように、様々な人物の会話が続くため、読むのに苦労した。漱石の博識ぶりが光っているが、「自然派」と「浪漫派」の話は、当時台頭しつ

つあった自然主義文学に対する若干の揶揄が込められているような気もする。

- 88、 三四郎と与次郎の二人の關係に「高い月」を配している点が秀逸。このことで、人物表現に格段の奥行きが出てくる。そうした中に世事である借金の問題が絡んでくるのが、まさに漱石ならではの展開である。
- 89、 連載当時の挿絵には、弓を傍らに置き、腕組みをしているキューピットが描かれている。このセンスには脱帽する。恋愛問題を深く見つめていくかぎり、このキューピットは時空を超えて悩み続ける存在であろう。
- 90、 今回も挿絵が振るっている。中央に大きく鎮座した香水瓶の後ろに円を描き、そこに三四郎、美禰子、よし子の小さな影絵を配している。これはいわゆる三角関係ではないが、三人の微妙な関係を巧みに表現しているように思う。
- 91、 野々宮兄妹のやりとりは、現代の兄妹関係にもそのまま出てきそうな雰囲気である。「広い日当の好い畠へ出たような心持がする。」とは言い得て妙。そして、当時の和製バイオリンは鈴木政吉製作以外は本当に質が悪かったのであろう。
- 92、 三四郎の言う第一の世界とそうでない世界との対比の段。よく当時の1円は現在のいくりに相当するかというようなことが言われるが、これを見るかぎり、東京と地方の格差には甚だしいものがあり、簡単には計算できないことがわかる。
- 93、 漱石が「夜」を描くときには、『夢十夜』にしてもそうであるが、独特の雰囲気が漂う。この段でも、正面から吹いてくる北風と夜半の寝覚めの火事とが印象深く描かれる。そして、日常世界に戻ると、与次郎との腐れ縁が相も変わらず続いているのである。
- 94、 中学教師の窮状と学生生活の呑気さの対比、そして、ジャーナリズムのあり方に対しても、現代に通じるような鋭い考察が述べられており、当時の世相が生々しく伝わってくる。中学教師を実際に経験した漱石ならではの筆致である。
- 95、 『ハイドリオタフィア』の当該箇所原文
- 96、 漱石自身も画を描くのであるが、アトリエの風景と絵画そのものの描写が殊のほか詳らかである。そして、「二人の美禰子の中に、時計の音に触れない、静かな長い時間が含まれている」という部分から、「時の流れが急に向を換えて永久の中に注いでしまう」というところまでの一段が頗る印象的である。
- 97、 漱石の先見性には度々驚かされるが、原口のことばの中に現代の非婚化の進展が予言されているようで興味深い。一方で、美禰子の描写に見られる

「その眼は流星のように三四郎の眉間を通り越して行った。」というような表現には凄味を感じる。

- 98、 原口が言及するまでもなく、美禰子の眼は多くを語っている。眼の動きだけで心理、というよりは心の周辺を描写していくという技法は、あるいはこの作品で漱石が意図的に実験しているのではないかとも思えてくる。
- 99、 漱石の芸術論が展開されている段。正岡子規の「写生」観が色濃く反映されているようにも思われる。絵画のことを原口に語らせながら、これを文学にも適合させていこうとする意図が感じられる。東西の審美眼の違いへの言及も興味深い。
- 100、 かなりしゃべっていたのではないかと思っていた美禰子が、意外にも「大抵の応対は一句か二句で済ましている。」ということである。原口の画ではないが、「心が外へ見世を出している所を描く」ことを、漱石自身が美禰子の描写を通じて丹念に行なってきた結果であろう。
- 101、 男女の微妙な駆け引き。そこに颯爽と登場する若い紳士。小説的な御膳立てが整ったような一節である。興味深いのは、ここには美禰子の眼の動きがまったく描かれていないことである。
- 102、 美術の次には演劇の世界が登場する。当時勃興しつつある演劇界の新風について、付かず離れずのスタンスで筆を進めていく漱石の立ち位置が感じられる。そして、そこに金銭問題が絡み、タイムス社の新しい販売方法が出てくるのも興味深い。
- 103、 ジャーナリズムにスキャンダルは付き物であるが、投書をそのまま活字化していくというメカニズムに注目している点は漱石の慧眼である。本邦人の「某氏」というのは漱石本人を自嘲的に描写したものとも取れる。
- 104、 与次郎が広田先生の認識通りに動き回るところが滑稽でもある。それにしても「著作権」ということばが登場してくるのも興味深い。日本の著作権法が制定されたのは1899年のことで、『三四郎』連載の9年前のことである。
- 105、 長めの地の文が続く段である。三四郎の母親の手紙は、旧態依然とした「第一の世界」を代表しているためか、文のリズムが落語を思わせるような語り口である。田舎と都会の対比が通り一遍ではなく、非対称的に錯綜しているように感じさせる点が漱石ならではである。
- 106、 広田先生の眠りには不思議な静謐感が伴う。死生観が修辞に満ちた文体で語られるという『ハイドリオタフィア』と広田先生が重なってくる所以であろう。そうは言いながら、女の夢を見る広田先生は一筋縄ではいかない存在である。
- 107、 広田先生の警句は今の世にこそかえって重みを持って響く。「記事を見て、すぐ事実だと思い込む人ばかり」が多いから様々な問題が起こってくる

わけであるし、「読者の悪感情を引き起すために、書いてるとしか思われやしない」ような文章に満ち溢れた現代社会も困りものである。

- 108、 夢の話になると、漱石の筆致は精彩を放ち出す。画の中の女は、描かれつつある美禰子の絵姿に重なってくるし、「僕が女に、あなたは画だというと、女が僕に、あなたは詩だといった」というのも意味深長なメタファーである。
- 109、 森有礼の葬儀の様子は漱石の実体験であろうか、生々しい描写である。そこに一人の忘れえぬ人の姿を重ね、愛と死の不即不離の関係を描き出す。そして、「結婚に信仰を置かなくなる」社会を先読みする漱石の透徹した眼差し。
- 110、 章が改まり、今度は演劇論が始まった。野外の演劇として神楽とギリシャの劇場の話が出てくるが、さすがの漱石もギリシャ悲劇は実際には観ていないだろう。しかし読んでいて、ふとトロイ遺跡を吹くエーゲ海の風を想起することができたのは、漱石の筆の力である。
- 111、 会話文のまったくない長い地の文で劇場内部の描写が続く。「無数の人間に附着した色が、広い空間で、絶えず各自に、かつ勝手に、動く」という表現には、何となくシュールなものを感じる。そして辛口の演劇批評は、漱石ならではのものである。
- 112、 遠く離れていて声が聞こえない人物の動きには独特のもどかしさが付き纏うものであるが、そうした感覚を巧みに文章で表現している。それ自体が演劇の活写とも言えよう。翻訳劇『ハムレット』に対する辛口の評も漱石ならではのものである。
- 113、 病に悩まされていた漱石の描く病の風景は皮膚感覚的なリアリティがある。熱っぽい三四郎が、「口を利き出すと、つるつると出る」ようになったり、言葉が短くなって「すうすう寝てしまった。」などというのも普通では出てこない表現である。
- 114、 結婚をめぐる男女関係については、100年前も現在と大差がないのに驚かされる。女性の上昇志向の強さと男女の非対称性とは、近代社会の始まる段階から、一足飛びに顕在化してくるのではあるまいか。そこを笑いに包みながら展開させるのが漱石の真骨頂である。
- 115、 快復期の病床の様子が巧みに描かれ、そこにタイミングよくよし子が姿を現わす。三四郎とよし子の会話は、ごく普通に展開していく。ただし、「渴いた人は、香に迸る甘い露を、したたかに飲んだ。」という表現は、特別な響きを持っている。
- 116、 忽然と文体が変わり、回想シーンが繰り返され、物語は終盤に差し掛かったことを思わせる。体言止めを多用して、文章に独特のリズムを与えてい

る。詩篇第 51 篇と言え、ペルコレージの原曲にバッハがドイツ語の歌詞をつけたカンタータも有名であるが、何と言ってもアレグリのミゼレーレであろう。芸術家に深いインスピレーションを与える詩句である。

- 117、 最終章は、序破急で言えば「急」の趣で、速く、淡々とした展開の中でさっと幕が下りるといった感じであろうか。三四郎の美禰子との出会いが、絵画という形をとって終結するのが何とも象徴的である。ここに様々な絵画のイメージを呼び込むことで、作品は奥行きと広がりを持つてくるのではなかろうか。